

草津市立矢倉小学校通信 令和3年12月15日 NO.15



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

ほんもののかかわりができたからこそ

2年生が1年生を招待して「おもちゃランド」を開いた。「わなげ」や「まとあて」「車レース」など、子どもたちの手によるお店が体育館いっぱいに設けられた。それは、まるでゲームセンターのようで、1年生はもちろん、2年生も心ゆくまで楽しんだ。これに触発されるようにして、今度は1年生が「あきまつり」を開き、4年生を招待することになった。

以前の「おもちゃランド」へ招待されたときの1年生は、気の向くまま、心ゆくまで好きなところを回って楽しむというものだった。が、「あきまつり」になると立場が逆転する。迎え入れることに心を砕かねばならない。当然、以前の楽しいだけの活動とは勝手が違うものとなる。ドングリや落ち葉を使った遊びのお店を開き、4年生にお客として来てもらうのである。こうなると、喜んでもらおう、満足してもらおうと、道具や景品に力を入れるだけでなく、本番では言葉遣いにも気をつけようとするようになる。お店の説明、遊び方などの口上は、あらかじめ決めておき、それなりに練習を重ねてきた。しかし、いざ本番となると、カードに記したメモを緊張しながら読み上げるのが精一杯で、相手にうまく伝わったかどうかなど、おこまいなしの子も現れるくらいとなる。招待された4年生は、そんな1年生のドキドキ感を察してか、一生けんめい伝えようとしていることをなんとか理解しようと、聞き耳をたて、時にはしゃがみこみ、うんうんとうなずきながら受けとめていく。日ごろの学年、学級だけの生活では見られない姿だ。

日々の学級生活には、いわゆる「慣れ」がある。だからこそ安心し、のびのびと感じたこと、思ったことが表に出せるものの、その「慣れ」が仇となり、ものごとをいい加減に受けとめ、背伸びをせずに安きに流れてしまいがちとなってしまう。ところが、このような問題は、日頃一緒にすごしていない、しかも少し年上の学年を相手としてやりとりすることになると事態は変わる。知っている限りのことを総動員して、相手を気遣うことをせねばならなくなるからだ。

一通り活動し終え、あいさつをすることになった。1年生は代表の子たちの「ありがとうございました」に続けて、みんなそろって「ありがとうございました」と元気よくあいさつできた。これを受けて、私は4年生に感想を求めた。もちろん打ち合わせはしていない。

「いろいろな遊びが考えられていて、どのお店もとてもよかったです。もらった景品に心がこもっていてうれしかったです。大事にします。」

「自分たちも1年生のときに、同じようなことをしたなあと思い出しながらお店を回っていました。とても楽しかったです。そして、自分たちのときよりも、よくできていて、すごいなあと思いました。ありがとうございました。」

いつもあれこれ指図する私たち教員が、静かにしなさい、わかりましたか、こんなときはこのように言うのだよなどと言わなくても、自分の言葉で感想とお礼の言葉を述べる4年生であり、1年生は、それこそよい姿勢で静かにしっかりと聞き、話が終わるたびに顔を見合わせ、にっこりし、同時に、4年生はなんてかっこいいんだと憧れのまなざしでみつめるのだった。

ほんもののかかわりができたからこそ、よく話し、よく聞き合える、そんな学びができたひとときだった。

大林 道範